

たんす

kioku 手芸館

（チ
リ
ン
チ
リ
ン♪）
実は、入口のガラス越しに細く棒状に巻いて小さなお転車が並んでいた、地元の手作り名人による作品群です。

第4号

たんす レタ!

まちの記憶

山王町の北門通りに面したところに kioku 手芸館「たんす」はあります。たんすのシンボルともいえる吹き抜けの階段を上がった2階の壁面には鈴木タンス店のご主人が使っておられた工具がずらりと並んであります。古く味わいのある床は塗料の染みが重なりあり、壁の工具を使って作業をしていたご主人の姿が想像されます。現在は、集まった編み物の撮影スペースとして使っています。撮影は午後3時から暗くなるまでの時間。この時間、柔らかな自然光が部屋に差し込みます。同時に、静かな影のあらわれる時間もあります。たんすに集められた編み物は、その光をはらみ、静かな影をともなって、柔らかな質感が浮かびあがります。



写真：草本利枝

まちの記憶を収集する過程を考えているときに浮かんだのが「編み物をほぐす／ほどく」ワークショップです。始まってから早いもので1年と3ヶ月が過ぎようとしています。このワークショップではセーターなどの編み物をほどいて、糸玉へと戻していきます。その作業をしているときに、ある参加者の方がぼそっと「糸が切れると、話も切れる」とおっしゃいました。この時間は編み物をほどくだけでなく、記憶をほぐす時間にもなっています。スルスルとほどけていく編み物、そうともいかない手強い編み物があります。はじめは様子をうかがうように優しく、慣れてくると時には強引に、編み物をほどく手のしぐさは、編み物と手が語り合っているようでもあります。糸がほどかれると共に記憶がほぐされ、天気の話題から、故郷、恋愛、山王のまち、商売など人生にまつわるさまざまな思い出

話や、日々の出来事など会話を交います。私がとくに興味をもったのは、恋愛の話です。恋愛の話は、山王に移り住むきっかけと繋がります。話を聞く中でわかったことは、地方から来られた方も多いことです。まちは人でつくられる。まちの記憶は人の記憶。まちの記憶は、その場所に限定されるのではなく、移り住む人、また別の場所へと移動する人と共に、過去にさかのぼって、未来へむかってもまちに留まらず、広がりをもつものではないかと考えるようになりました。

着る人のことを思って編まれた、誰かが身につけていた編み物をほどきながら、記憶がほぐされていき、その話しを聞きながら、記憶がつながっていく場。この1年数ヶ月の活動で、このワークショップが、そのような場になっていることを実感しています。

編み物をほどくという行為は少しのスペースがあればどこでもできることですが、記憶をほぐす場というのは、その時、その場にいる人、つまり「たんす」を訪れたまちの人によってつくられていると感じています。「たんす」でしか引き出すことのできない記憶があるように思います。(呉夏枝)



「たんす」のひき出し

第4回 内山 幸子
(「たんす」プログラムディレクター)

昨年12月から「たんす」で、皆さんとプロジェクトに携わっています。1年間滞在したメキシコから帰国したばかりだった私は、魂だけ地球の反対側に残してきたような気持ちでした(メキシコの国民的キャラクターの陽気なガイコツのように?)。

「編み物をほどく／ほぐす」ワークショップを通して「たんす」を訪れる方々と出会うなかで、所在ない気持ちがゆっくりと着地していく気がします。ほどいている時は、ひたすら編み目を追って解いているんですが、後に思い返すと、その間の時間感覚は不思議です。まず作業に没頭しているので、「時間を作る」という感覚があります。さらに、参加者同士で街の昔の話や思い出が語られることが多く、ふいに自分のひき出しの開けてみることがあります。過去は「後ろ」に置いて来たのではなく、今の自分の中身なんだな、と再確認します。そして、編み物経験がほとんどない私ですが、ほどく作業を通して、この街の「編む人」の気持ちを想像してみているところです。

最近は「たんす」を開けていると、ご近所さんや通りすがりの人が訪問してくれることが多くなりました。この地域ならではだと思うんですが、笑いながら先方から敷居を越えて入って来てくれる感じに、いつもじんわり幸せを感じています。近ごろは、どうやらあんな風になれるのかしら、と観察しているところです。